

学習指導要領の理念をどのように具現化するか —「日本史探究」の定期考査のあり方とは—

東洋大学附属牛久中学校・高等学校教諭
本保 泰良

1. はじめに

「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」p.63「第2章 各学科に共通する各教科 第2節 地理歴史 第2款 各科目 第4 日本史探究 1 目標」では、「社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す」としている。では、先の目標を達成するために必要とされる、「社会的事象の歴史的な見方・考え方」とは、具体的にどのようなものなのだろうか。「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編」p.193「第2章 地理歴史科の各科目 第4節 日本史探究 1 科目の性格と目標(2) 目標」では、「社会的事象の歴史的な見方・考え方については、平成28年12月の中央教育審議会答申を踏まえ、『社会的事象を、時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付け』て働かせる際の『視点や方法(考え方)』である」と述べられている。

この「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を生徒に身に付けさせるには、普段の授業のあり方を再考するとともに、どのような定期考査を作成すべきなのかということを考える必要がある。なぜなら、授業と定期考査は連動しているからである。歴史を単なる暗記科目ではなく、今後生徒が、現代の日本の諸課題を考察し、その展望を探究する力を養う科目にしていくことが重要である。そのためには、歴史的事象にはどのような意味があり、その後の歴史とどう関連し、影響を与えているのかを考えさせることが大切ではないだろうか。こうした考え方に立脚した定期考査の一例を紹介してみることにしたい。

2. 定期考査と授業のあり方

以下は定期考査の問題例である。

○「思考力・判断力・表現力等」に関する問題

有力な戦国大名は城下町を建設して、武士のほか、商工業者も集住させることで、領国の政治・経済・文化の中心としていったことが知られている。この戦国大名による城下町の建設が、「武士が抱える軍勢力としての問題点」を克服するための政策だと考えた場合、城下町の建設の意義をどのように説明することができるだろうか。以下の設問1・2に答えなさい。その際、それぞれに示した[使用語句]を必ず使用することで説明しなさい。[設問2]は、解答欄に記載されている書き出しに続けて書きなさい。

[設問1]〈先生の解説〉・〈留意点〉から、「武士が抱える軍勢力としての問題点」を述べなさい。

[使用語句]半農半兵・軍勢力が低下

[設問2]城下町の建設は、[設問1]をどのように克服しようとしたのかを述べなさい。

[使用語句]兵士という職業・兵農分離・軍勢力を維持
〈先生の解説〉

平将門は東国に独立王国を作ろうと考え、武力によって東国の多くを支配したのですが、不思議なことに、940年の1月下旬に突然兵士を解散させてしまったのです。『将門記』には、平将門の乱を鎮めるために派遣された藤原秀郷が、平将門の本拠地を攻めて、建物・施設や食料を徹底的に焼き払ったと書かれてあります。そして、2月14日の戦場で、軍勢力の面で不安を抱えていた平将門は、あっけなく矢に当たり、命を落としました。

〈留意点〉

1. 当時の大規模な戦争は、基本的には秋から冬にかけて行われるのが一般的であった。
2. 平将門が兵士を解散した1月下旬は、現在では冬という印象が強いが、当時は春の始まりの季節であった。
3. 農繁期と農閑期という面を考慮に入れる。

〈解答例と配点〉

〔設問1〕武士は半農半兵の状態だった^{2点}ため、農閑期にしか軍勢力として機能しなかった^{2点}。こうして農繁期には軍勢力が低下する傾向が強かった^{2点}。(6点)

〔設問2〕(戦国大名は、)武士を城下町に集住させ、兵士という職業に就かせた^{2点}。こうして戦国大名は兵農分離を進める^{2点}ことで、軍勢力を維持することに努めた^{2点}。(6点)

生徒に考えさせたいことは、次の流れである。

平将門が戦いに敗れたのは、決して偶然ではないということである。〔設問1〕では、当時の武士が抱えたシステム上の問題点に、この問いを通じて生徒に気づかせたい。そのための足場かけとして、〈先生の解説〉・〈留意点〉を用意し、〔使用語句〕を指定する工夫を行った。〈先生の解説〉から、どうして平将門は1月の下旬に兵士を解散させなければならなかったのかを考えさせている。しかし〈先生の解説〉だけでは、この問題を考えることが困難だと思われたので、〈留意点〉を示し、その中で1月下旬は春であり、農繁期と農閑期の面を考慮させることで、なぜ〔使用語句〕中に、「半農半兵」と「軍勢力が低下」が入っているのかを考えさせた。つまり、当時の武士は農繁期に入ると、農民として農作業の担い手となってしまう、農閑期にしか軍勢力として機能しなかったため、大きく軍勢力が低下することになったのである。平将門は春になったので、武士を軍役から解放して農作業の準備を行わせなければならなかった。藤原秀郷らは、まさにこの隙を突いたのである。藤原秀郷らが、平将門を討ち取ることができたのは、当時の「武士が抱える軍勢力としての問題点」を熟知していたからに他ならない。

こうした問題点を解消するべく、戦国時代の大名が兵農分離政策を推進したのは、当然のことであったと考えられる。今回の定期考査〔設問2〕では、この兵農分離と城下町建設との関連性について考えさせる取り組みを行った。城下町の発展に大きく貢献したと考えられる織田信長は、兵農分離を実現するべく、武士を安土城下に強制移住させた。こうすることで、半農半兵という性質上、農繁期における戦争への動員が困難であるが故に、長期戦の展開が課題であった状況が解消され、農繁期でも大規模な軍

事行動が起こせるようになったのである。

歴史の授業では、先の「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編」でも述べられているように、物事を因果関係で関連付けられるような工夫が必要であると考えられる。今回の定期考査では、城下町の建設の意義を問う内容であったが、例えば、この城下町について、北条氏の城下町は小田原、今川氏は府中、上杉氏は春日山という事項を暗記させるだけではなく、地政学の面から、なぜその地に城下町を建設したのかということを探究させることも、生徒に歴史を多角的・多面的に捉えさせることに有益な授業になり得ると考えられる。

私の授業では「問い」を設定し、生徒が主体的かつ対話的に「問い」に取り組むことで、深い学びに到達することができるように工夫している。定期考査では、授業内で理解したことを単にアウトプットするだけの場にならないよう配慮している。説明文を書かせるにしても、暗記したものを考査の場でアウトプットするだけであれば、それは暗記できたかを問う試験になってしまう。授業で思考した知見を踏まえて、考査で出題された資料を使うことで、自分で考えて表現させることが重要だと考えている。

「学習の転移」という言葉がある。学習したことを別の場所や時間で活用・応用するということである。「学習の転移」が起こるためには、学習の仕方が影響すると考えられている。暗記型の学習グループと理解型の学習グループとの比較において、学習したときの問題とは別の応用問題に対応することができたのは、理解型の学習グループだったという研究がある。学んだことが、その後に生かされた証左ではないだろうか。歴史を学ぶことは、これから生き抜く力になると信じたい。私たち歴史教員にできることは何かを、これからも考え続けたい。

【参考文献】

「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」(文部科学省2019年)

「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編」(文部科学省2019年)

川尻秋生『平安京遷都』(岩波新書2011年)

大島純・千代西尾祐司編『主体的・対話的で深い学びに導く 学習科学ガイドブック』(北大路書房2019年)